
正夢

フェイクファー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正夢

【Nコード】

N9046S

【作者名】

フェイクファー

【あらすじ】

平凡な中学二年生、夏乃^{ナツノ}はある日交通事故に遭い霊能力を身につける。「現実が夢に合わせる」「夢透視は決して悲劇のためのものではなかった……」。
少女の友情と決意を描く。

<事故>第一部

「夏乃！ 夏乃……！」

誰かが遠くで呼んでいる。やがて私は目を覚ました。

「夏乃！ 良かった」

辺りを見回すとそこは病院だった。

「お母さん？ ここは？」

逆光で顔が陰っている母に、私は尋ねた。

「病院よ。 交通事故でここに運ばれたのよ」

私ははつきりと思い出した。日曜日なので、久しぶりに母と買い物に出かけたその帰り道に、青い車と衝突したのだ。

「脳震盪と言われたのに……なかなか起きなかったから心配したのよ」

母が言った。

「大丈夫だよ」

私は半分呆れて言った。

「そう……じゃあ明日から学校へ行けるわね」

母が笑顔で言った。

私は眉を少し吊り上げて、苦笑いをした。

<事故>第二部

「夏乃！ 大丈夫？ 事故に遭ったって聞いて心配したんだよ」
次の日の朝、親友の砂沙が挨拶代わりに言った。

「大丈夫、大丈夫！ ちょっと頭ぶつただけだから」
私は目で「ありがとう」の気持ちを表しながら言った。

私と砂沙は親友だ。何でも話を聞いてくれるし、一緒にいて心が
落ち着く。

チャームポイントのツインテールが今日も乱れているのを見ると、
少なくとも「しっかり者」ではないことがわかる。

「なおさらバカになっちゃったんじゃない？」
ニヤニヤしながら砂沙が言った。

「砂沙と同じくらいになっちゃったってこと？ それ相当シヨツ
ク……」
私もニヤけて言った。

私と砂沙は一緒に笑った。他に友達がない私達は、周りから何
と言われようとお互いが好きだし、分かり合っていた。

「でもね、本当にバカみたいな夢なら見たよ。確か三校時あたり
だったかな？ ピアノがひとりりで鳴り出すの……そしてなぜか先
生がチョークを投げつけて、鳴り止むっていう……」

「アハハ！ 変なの！ じゃあもしそれが本当に起きたらジュー
ス一本おごったげる。起きなかつたおごってね」

「なにそれ！？ ありえないからっ！」

「うん、帰り道で良いよー」

無邪気にふざけている砂沙を見て、私は呆れてしまった。そして

「チャイム鳴るよ」とそっけなく言った。

「え？ ピアノ？」

しつこくからかう砂沙を無視して私は席に座った。

砂沙は不安げな顔ですっと私を見ていた。

私は砂沙に振り返って、静かに笑ってみせた。

<事故>第三部

三校時がきた。砂沙はニヤニヤと私を見ている。だが授業を半分ほど過ぎたとき、信じられないことが起きた。

「ポロロン……ポロロン」

ピアノがひとりでに鳴り出したのだ。

教室中が騒がしくなり、先生が注意した。

それでもなかなか静まらないので、次の瞬間、先生がピアノに向かってチヨークを勢い良く投げつけた。

チヨークは音を立てて砕け散り、ピアノの音は止まった。

「何だ？ 今の……」

クラス中がまだざわめいている。

「静かに！ 故障だ故障！ 授業に戻るぞ！」

先生が大声で言った。

私は砂沙を見た。さっきまでニヤけていた顔が、驚きと恐怖で無表情になっていた。口だけが、かすかに開いていた。

「ジューズ一本！」

授業が終わって、私が砂沙に言った。

「ねえ？ どういうしかけ？」

「しかけなんか無いって。私もびっくりしてるんだから」

「……事故？」

「というか偶然というか……」

「正夢というか？」

「……正夢…そうかもしれない。全部夢の通りだもん」
「……………」

二人は黙りこくった。

やがて砂沙が口を開いた。

「まあそうなんども続かないよ」

「うんそうだね、続いちゃったら私の家がジュースの缶で溢れかえっちゃうもんね」

私はいたずらに言った。

「帰り道が楽しみだなー」

<夢透視>第一部

次の日、私と砂沙は学校の屋上にいた。

「で？ 今日はどうな夢を見たの？」

砂沙が私に尋ねた。

「ゴホン……」

私はわざとらしく咳払いをした。

「この屋上に無人の気球が着陸。晴れの予報だけど大雪に
私は続けた。」

「神様みたい。デジャブとかじゃないの？」

「デジャブって？」

「ほら、“この場面夢を見た”とかいうときがたまにあるでしょ？
？本当は夢で見たわけじゃないのにな」

「でも、ありえないことが起きてるじゃない」

「……………今日のいつ？」

「もうすぐ。あっ！ あれ！ あれだよ！」

私は遠くからゆっくりと近づいてくる気球を指差しながら言った。

やがて気球は屋上に着陸した。中には誰も乗っていなかった。

「傘も必要になりそうだね」

砂沙が驚きながら言った。

「どうしよう……これどういづことなの？ 何で正夢ばかり…
…」

「正夢っていうか、現実が夢に合わせてる気がするんだけど」
砂沙が言った。

「現実が夢に？」

「でもさ夏乃！ それで人を救えたりするんじゃない？」

「どういづこと？」

「事故とか災害とかの夢を見たときに、それを事前に防ぐってこ
と！」

「でもさあ……私がそんな夢見なきゃそうなることもなかったっ
てことでしょ？」

「人を助けることには変わりないんだよ。それにさ、そうやって
夢で見た運命を変えていくことによってその能力も薄れてくるんじ
ゃない？」

「確かに……そうかも……」

「きっとそうだよ。大丈夫、すぐ治るよ」

「ありがとう、砂沙」

「まあ……ね。頭良いと感謝されること多くてね」

砂沙は照れを冗談で隠しながら言った。

「頭のよろしい砂沙さん。次の授業は数学のテストが返ってきてますよ」

私はニヤケて言った。

「何でそんなに嬉しそうなの？ 夏乃も大の苦手でしょ？」
砂沙が尋ねた。

私は屋上から階下へ下りる階段のところまで来た。

「百点取る夢、見ちゃった」

<夢透視>第二部

それから約一ヶ月は特に何事もなかった。ちょっと不思議なことが起こるだけで、逆に良いこともあつたくらいだ。

だがある日、ベッドから飛び起きた私は顔も洗わずに地図を引っぱり出した。

そう、私はついに悪夢を見てしまったのだ。近隣の街“黒鷲の街”の高層ビルに、航空機が突っ込むという夢だ。

そこで私は地図で調べて、その現場を確認した。

“黒鷲の街”は、私たちの住む“黄ビタキの街”からは少し距離があり、朝早くから出発しなければならなかった。

私は電車に乗って黒鷲の街へ向かった。

そして事件の一時間前によく私は到着したのだった。

「すみません、今日飛行機がここらを通過しませんか？」

私は警察署に来て、こつ尋ねた。

「それは調べないとわかりませんが、確か今日は通らなかつたと思いますよ」

「今すぐ全空港に連絡してください！あと一時間であるビルに飛行機が突っ込むんです！」

予想通りの反応だった。警官数人に大笑いされ、軽蔑の目で睨まれた。

「何か証拠でもあるのですか？」

「ええと……………夢で見ました」

私はうつむいて言った。警官たちはまた同じ反応だった。

「どこから来ましたか？ お住まいは？」

「黄ビタキの街です……………オレンジストリート五番地です」

「病院に通ってたりは……………？」

「さようなら」

私は警察署を飛び出した。そして無理だとわかっていたが空港に向かっ

て走った。電車は便がなく乗れなかったが、バスが丁度あったので二十分ほどそれに乗って進んだ。

そしてまた走りつづけた。

だがとうてい間に合わなかった。私は道路の隅に腰掛けてしまった。

そして正午、ついに飛行機がビルに突っ込んだ。私はそれを遠くから確認した。

<監視>第一部

「まさか、夏乃じゃないよね？」

次の日の学校で、砂沙が私に訪ねてきた。

「夏乃？」

私は黙っていた。昨日の自分が情けなく思ったし、何より恐ろしかった。

もしかしたら、こうして砂沙と話すこともできなくなってしまうのではないかと。

その日は何事もなく過ぎた。だが事はその翌日起きた。

警察署に事件同時訪れた少女、つまり私を全力で捜査しているというのだ。私はそれをニュースで知ったので、学校には行かないつもりでいた。

だがそんな努力も虚しく、正午を過ぎた頃、学校の先生がドヤドヤと押しかけてきたのである。後ろには数人の警官がいた。

「夏乃。こちらの方々が……君を呼んでいる」

私の担任が息を切らしながらこう言った。

二十分後、私は取り調べ室にいた。

「ええと……夏乃さんですね？ 少し尋ねたいことがあります」

「はい」

私は答えた。

「事件同時、君は私たちに可笑しなことを言いましたね？」

「はい」

「あのときは信じませんでした。あの予言が現実となつて起つたのです……。このことについて、何か弁明がありますか」

「弁明といつても……私は夢で見ただけです」

「それは本気で言っているのですか」

「信じていただけないのなら、別に構いません」

私はキツパリと言った。

「……詳しくお話願います」

警官は面喰らつたようにこつ言った。

それから私はすべてを話した。その全部を信じている様子は見受けられなかったが、私は或満足感を覚えていた。

「それがもし本当なら、大変なことです」
やがて警官が言った。そして

「あなたは夢を見てはいけないということになる」と、続けた。

「じゃあ寝ないでいると？」

私はイライラしながら言った。

「それはそれで困る……さてどうしたものか……」
しばらく沈黙が続いた。

それからは話が進展しなかったので、正式な処置は三日後に出す
とのことだった。

その際、悪夢を見ませんようにと、警官は言った。

「何なら日本がバブルになる夢でも見ますよ」

<監視>第二部

“正式な処置”は極めて酷いものだった。

一つは、三日間一切睡眠をとらず四日目には熟睡するといふもので、人は熟睡しているときは夢を見ないことが多いからだという。もう一つは「監視」で、警官による自宅の軟禁だった。

「本当カタいんだから！ もっと他に良い策がある筈だよ」
次の日の学校で砂沙が私に言った。

「この街も最近、何だか蓮色の街みたいに衰えてきてるからね」
私は言った。

「街の問題じゃないでしょ！ 生活リズムが狂っちゃっよ」

「うん、狂わすのが目的なんだって」

「えっ、どういうこと？」

「そうやって睡眠のリズムを崩していけば、夢透視の力が衰える可能性はあるんだって」

「辛かったら……その、私に言ってね」
砂沙は顔を背けて言った。

「ありがとう」

<悪い夢>第一部

睡眠のリズムを狂わす計画は皮肉なことに上手くいった。

監視が始まってから一ヶ月、私は夢をあまり見なくなつた。見たとしてもそれが途中で途切れることがほとんどで、大事に至ることはなかつた。

だがそんなある日、私は見てはいけない夢を見てしまった。

それは砂沙が死ぬ夢だつた。私は恐怖のあまり汗が吹き出て、目の前が真っ白になつてしまった。しばらくボーっとしてからようやく飛び起きて、急いで支度をし、学校へ向かつた。

学校に着いた私は砂沙に打ち明けるか打ち明けないかを非常に迷つた。

「今日死ぬつて」

なんて言われたら、どんな気持ちになるだろう？

結果私は「不吉な事」とごまかして、常に砂沙の周りにいることを許してもらつた。

学校は半日で終わり、私は砂沙を家に招いた。そしてどこへも行かないように、密かに見張ることにした。

砂沙は交通事故で死ぬことになっており、今日この一日さえ凌げれば、夢は覆る。

私は砂沙の側から離れなかつた。

<悪い夢>第二部

「なんでさつきから私の方ばかり見るの？」
テレビゲームをしながら、砂沙が私に言った。

「……えーっと、不吉な日、だからね」

「大丈夫だよ、もう、せつかく楽しいのにさあ」

テレビゲームは砂沙のリクエストで、サッカーのゲームだ。女の子であるがサッカーが大好きな砂沙は、テレビゲームと言えばサッカーのゲームだった。

それでもなぜか試合では素人の私が勝つ。そのとき見せる、砂沙のふてくされたような可愛い顔を見るのが、私は好きだった。
こんな楽しいことがいつまでも続けば良い。私の中で、命取りになる甘い考えが芽生え始めてしまっていた。

「ちよつとトイレに行くから待ってて」
試合の区切りで、私はこう言った。このとき私は、「トイレくらいなら大丈夫だろう」と思って気にしなかった。

だがそれから間もなく宅急便が届き、砂沙が玄関のドアを開けてしまったのだ。宅急便屋さんはポストに何か入れただけで、そのまま帰っていった。

だが砂沙はそのまま中へは戻らず、私が飼っているスピッツ犬を見つけると、一瞬パツと顔を輝かせてから、犬ところまで走っていき、抱き上げた。

そのとき丁度私はトイレから出て扉を閉めたところだった。

「ーダメ!!!」

一瞬の後、砂沙は私の前から姿を消していた。車が私の庭に突っ込んだのだ。砂沙に抱き抱えられてたお陰で傷を負わなかったスピッツ犬だけが、ビクビクとした様子で私の方へ歩いて向かってきたのだった。

<嫌われ者>

それからというものはずっと独りぼっちになってしまった。周囲から避けられ、「正式な処置」に苦しんだ。殺人犯扱いされ、私は次第に衰弱して行くのを感じた。

砂沙の言葉が断片的に蘇って、それを反すうする日々が続いた。夢は以前ほど見なくなり、能力の薄れも感じ始めていた。

だが私の心は晴れなかった。このまま本当に能力がなくなったら、いよいよ人の役に立つこともできなくなる。能力が消えても、砂沙のことが無くなることはない。私はそれを一生背負って生きなければならぬのだろうか。そう考えると、私は慄然とするのだった。

そして砂沙がいなくなってから約半年後、私はまた悪夢を見てしまった。

「地震がくる……。みんな津波にもってかれちゃう……。私の街がなくなっちゃうー!」

ベッドから起きた私はまず母にそのことを伝えた。母はどんなときも私を見捨てないでいてくれた。

そして今回もそうだった。母は私の話を聞くなり外へ飛び出して、私の手を引き警察署へ向かった。

<嘘つき>

「わかりました。あなたの夢なら、信じてみる必要がありますね」

この警察官の発言に私は頭を下げた。何より、嬉しかった。

「いつ頃来るか、わかりますか」

「明日の早朝です。起きてない人もいる時間帯に」

「わかりました。では今すぐ手をうちましょう」

警官はパンと手をたたき、勢いよく立ち上がった。警官は街内とその周辺の警察署全てにこの旨を電話で伝えた。黄ビタキの街をいくつかの区域に区切り、各区域に警官を割り当て、この非現実的で不確かな事実を伝えるようにした。黄ビタキの街とその周辺とはいえ大変狭く、この一連の作業は何の滞りもなく進んだ。

だが警官の説明を聞いても、当然のようにそれを根っから信じない者が出てきてしまった。

「アンタ、嘘つきだろ？ 信じれる訳ないよ」

私が立ちあわせた区域の町民の一人が、私に遠慮なく言った。

「そうだ、そうだ」と一部からヤジも飛ぶ。

「それに最近は全然夢を見ないそうじゃないか。もう能力なんて消えているんだよ。だから昨日君が見た夢はただ普通の夢さ」

私は黙っていた。

「だいたいそんな規模の地震で、この街とその周辺のほんの一部しか被害を受けないなんてのが可笑しい。私は従わんよ」

「信じてください……」 漸くして私は口を開いた。

「信じてください！ これが最後なんです！ そして私に残されたたった一つの使命なんです！」

人々は皆一斉に静まり返った。

「私は夢の中で親友を亡くしました。だから誓ったんです。その分多くの人たちを救うって……わかってください……親友のためにも」

少し沈黙が続いたがやがて、「オレは信じるぞ！」という一つの声と共に、「オレも！」「私も！」という賛同者が次々と続出した。それは波のように広がり、ついには九割が賛同者となった。

だが残りの一割の人たちは頑なに反対した。そして終いには暴言を吐き、その場から立ち去ってしまった。

<最後の夢>第一部

街の九割の人々が動き始めた。大切なものを大きな袋に詰め込む人、避難場所を確保する人、泣き叫ぶ子ども……。

私はそんな人たちを見て、何か取り返しのつかない過ちを犯したような心持ちでいた。本当に心から申し訳ないとも思った。そんな負の思考回路が巡りに巡って、私の心を当惑させていた。

何故街の九割もの多くの人々が避難を決めたのかと云うと、それは人間の心理である。

私が居合わせた区域以外にも、勿論反対する者がいた。むしろ私の演説を聞いていない分、その人数も多かった。だが私が居合わせた区域の九割もの人たちが避難を決心する姿を見て、「これは何か確信的なものがある」という気持ちを芽生えさせていたのである。こうなると人間は、多くの人間について行く。反対だった者も次第に賛同していき、街の九割の住民にまで至ったのである。

だが一方で、それだけの影響を受けていながら、反対する心を貫き通す者もいた。

彼らはずいとその日の夜が来ても、避難を決心しなかった。私にも警官にも、彼らを動かす術はなかった。

そこで私は、地震が起きてからでも逃げられるような抜け道をつくろうと提案した。反対する者たちは嘲るようにこれを見て笑っていたが、その提案はすぐに実行に移され、夜中までかかってようやく完成した。

その翌日、一番早くに目を覚ました私は、避難場所からやがて消

える街を見下ろした。そして次の瞬間、大きな音を聴いた。揺れ始める地面と共に、ここで多くの人が目を覚ました。

「本当に来たぞ！」

一人の男性が怒鳴った。それから私は、その声を合図にするように、昨夜つくった抜け道へと駆け出した。残った反対者たちを助けたかったからである。一人でも死んでしまつては砂沙への誓いが無意味になると思つたからである。

「戻りなア！」

一人の年輩の女性が叫んだ。だが私は振り返らず走り続けた。

「オレがいく！」

先刻怒鳴つた男性が走ろうとした。

「ダメだ！ 大勢で行つたらそれこそ危ない！ 誰か必ず死んでしまふ！」

別の男性が大声を張り上げてそれを制した。

それから、

「信じて待とう、彼女を……」
と言つた。

<最後の夢>第二部

私は、抜け道を通って逃げてくる反対者達に向かって唯「逃げてください！」と叫びながら、彼らとすれ違っただけだった。

途中、「済まなかった」と涙をためて言う人もあれば、泣きながら走る人もいた。

私はもうこれ以上人がいないことを確認し、引き返そうとした。だが次の瞬間、「助けて！」という声と共に、女性が建物の下敷きになっているのを見た。

轟音はいっそう大きくなり、揺れも尋常ではなくなり、立っているのがやっとである。私の位置からはまだ遠いが、津波も段々と押し寄せてくるのが一目瞭然だった。

「大丈夫ですか!?!」

私はそう言いながら女性に近づいていき、女性にのしかかった建物の破片を一心にどけ始めた。幸いのみしかかっていたのは足だけで、私でも充分にどけることができた。

「良かった……。さあ逃げましょう!」
私はこう促した。

「待って……。待って! 子どもがいるの! 家のどこかに! まだ歩けもしないのよ!」
女性が言った。

「そんな……。……。私が捜します。今ならまだ間に合う。早く逃げて!」

「そんなことできるわけないでしょ！ 私も捜すわ！」

「あなたは足を怪我しています。私の方が素早く動けるし、確実に逃げられます。だから私を信じて！ 今度はちゃんと、信じてください！」

女性は一瞬呆然とした顔で私を見てから、何も言わずにクルリと後ろを向き、痛む足を引きづりながら抜け道を走っていった。

津波はもう、すぐ近くまでできていた。だが私は諦めなかった。とても大きな不安と恐怖が襲ってきて、視界が何度か霞み始める。それなのに何故か私は、「全員逃げ切れただろうか？」ということばかり考えていた。その度に砂沙の笑顔が浮かんでは消えた。自然に溢れてくるものがあつた。私は今、砂沙のために、自分のためにこんなことをしている。その一念が私の目の奥の涙腺を刺激したのであろう。私はよりいっそう気を引き締めた。

だが必死の努力も虚しく、それから約十分後、大きな波が私を呑み込んだ。

< 覆った夢 >

目を覚ますと母の顔があった。轟音も震動も止まっている。私は徐に体を起こすと、そこはあの避難所だった。大勢の人が歓喜の声をあげている。一方で、当然のごとく、泣いている人もいた。私はその歓喜の声から、「誰も死んではないのだ」ということを悟った。

「赤ちゃんは!?!」

私は我に返って、助けると約束した女性の子どものことを思い出した。

「大丈夫よ。あなた、ずっと抱きしめていたわ」

母が優しく答えた。

「本当に、何とお礼を言ったらいいか……ありがとう……ありがとう……」

側にいたあの女性が泣きながら私に言った。私は口元を少し微笑を含んで、無言で首を振った。それが一番良いと思った。

「……でもどうして私は助かったの？ 波に吞まれて……」

私は母に曖昧に尋ねた。すると母は、いやそればかりか周りにいた大勢の人たちが目に涙を浮かべた。それが悲しみの涙ではないことは、私にもわかった。

「砂沙ちゃんよ」

ようやく母が言った。

「えっ……?」

「あなた奇跡的に抜け道の入り口に流れ着いたのよ。砂沙ちゃんの墓石につかまってね」

「墓石に？」

「そうよ。津波で流されたと思うけど、砂沙ちゃんの墓石があなたのところに流れ着いて、あなたを岸まで運んでくれたのよ」

私は信じられない気持ちでいた。そして心の中で何度も何度も大きな声で、砂沙の名前を叫んだ。それから泣いた。それでもそれは、悲しみとは違う何かだという感覚があった。

それからしばらくして、私は涙を拭い、「私の話を聞いて」と言った。

実に多くの人が集まってきた。

「私、本当はね、夢では死んでたの」

母もその周りの人たちも、驚いた様子でざわつき始めた。

「っていうより波に吞まれたところで途切れて……その先はずっと真っ暗。だから今日で最後って思ってた」

ざわめきはいつしか止み、皆真剣に聞き入っていた。

「つまり夢が外れたんです。もう、見ることはありません」

私はできるだけ笑顔をつくって言った。

「良かった……」

まず母が泣き崩れた。

「ああ、良かった、良かった」

次々と喜びの声が湧き上がった。拍手をする人も出てきた。そしてそれは途切れることなく続いた。一日中終わらないだろうとも思うほどだった。

その、なんとも言えない暖かいものに包み込まれながら、私は心
の中で言った。

「砂沙、ありがとう!」

・
・
完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9046s/>

正夢

2011年11月20日19時12分発行